

2007年号

# 青峰同窓会会報



## contents

会長挨拶.....	2
新任校長挨拶.....	2
前校長挨拶.....	3
卒業生便り.....	4
伊藤 豊嗣	
西山 仁	
森下 誠	
学科近況.....	8
退職教職員.....	12
松田教員	
小倉教員	
吉川教員	
会計報告・会計予算.....	15
編集後記.....	15
SHTN便り.....	16



## 会長挨拶

青峰同窓会会長  
小手川 智 (42C卒)



### 『同窓会の継続的な発展を願って』

同窓会会員の皆様におかれましては、お変わりなくご健勝のこととお慶び申し上げます。

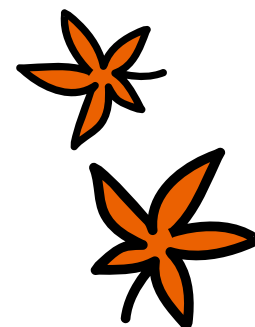
2007年度の同窓会報(秋号)をお届けします。本来、同窓会報は同窓会員にのみ年1回発行しておりますが、今回は卒業生名簿を作成する目的もあって卒業生全員に発送いたします。

卒業生は今年3月の卒業式を終えて6300名を数えるに至りました。初期の1学年の卒業生が120名であったことを思うと積み重ねられた数字に歴史を感じます。同窓会は1期生の卒業時に結成されましたが、当時は今のように卒業生全員が卒業時点で同窓会員になると云うことではありませんでした。そのため初期の卒業生の中には入会手続きの出来なかつた方がおられます。この機会に是非、

入会されることをお勧めいたします。同窓会員には同窓会報が1年に1度届けられます。更に5年周期で卒業生名簿をお届けしております。同窓会報には母校や同窓会員の動向が掲載されます。同窓会は母校と卒業生を結ぶ重要な役割を担っております。今後その役割はますます大きくなると考えております。母校を「心のふるさと」と思っていただけの時が来ると思っております。

大変ありがたい事に同窓会活動の実践運用は母校卒業生教職員の皆様の尽力によって行われております。このことを申し添えておきます。

同窓会員の皆様には今後とも変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。



ている一方、半数近くの学生が進学しています。これも卒業生の皆様が長年にわたり築きあげてきた伝統と実績の成果であると感謝いたしております。

今、国立の高専は高等教育機関としての認証評価、独立行政法人制度の下での評価など、運営の透明性確保と説明責任を果たすことが求められており、この中で、高専での実践的教育と卒業生が身につけた付加

価値を評価する声が国内外で高まりつつあります。少子化の進行と厳しい行財政事情は逆風になりますが、同世代の1%弱を入学定員とする「高専」を選択した学生の個性に応え、その個性の一層の伸張と教育の質の向上を図ることが大切と考えています。存在感のある元気な学校づくりに微力を尽くしたいと考えていますので、今後とも御指導と御支援を賜りますようよろしくお願い致します。

## 前校長挨拶

前校長  
中根 孝司  
国立青少年  
教育振興機構理事



### 『魂と品格のある学生(青少年)の育成を』

本年4月、鈴鹿高専から標記独立行政法人に異動になりました。この結果、学生から青少年に、学校教育から社会教育に、それぞれ対象分野や教育手法を異にすることになり、急いで頭の切り替えをしなくてはならない事態に至りました。

これは個人的な例えにすぎませんが、現職について思うに、昨今の政治経済現象等を見るにつけても、今後の学生(青少年)には視野を地球規模で幅広く捉えてもらい、自分の頭で物事を得心いくまで考えぬいた上で決断し、その後は迅速に行動することが求められる時代になっていることを実感するようになりました。そのためには、学生(青少年)が自ら、その考え方の基本となる世界観や倫理観・価値観等をきちんと確立した上で、全体的な状況判断とバランス感覚を磨いていくことが最も重要となっていくと考えます。

これからの高専教育については、在任中にも屢々述べてきたことではありますが、入学該当年齢層の減

少や高等教育の大衆化等に伴い、教育の質の向上と、その質を客観的に保証していくという社会的な仕組みが求められています。このため、各種の評価に耐えうる特色ある教育を学校自らが思考し、構築し、実践していくことが肝要となります。それには、高専制度を一定の許容範囲を持った、より柔軟な教育システムに改善していく一方で、その中において、どのような知識や技術を持った技術者として学生を育てていくのかという具体的なイメージを踏まえた教育制度の設計が社会的に問われることとなります。

広漠たる高等教育の中において、高専は稀少かつユニークで、高度で実践的な教育プログラムを行う機関として存立し、その学生は優秀で、我が国の将来の一翼を担う人材であります。そのような意味からして、教職員の皆様には、(鈴鹿)高専魂を持ち、知徳体のバランスのとれた、品格のある技術者の養成に傾注していただきたいと思っております。

## 新任校長挨拶

新任校長  
高橋 誠記



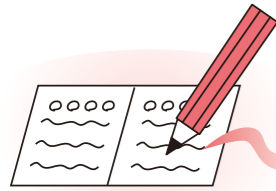
今年の夏は、岐阜県と埼玉県で気温が40.9度に達し、我が国の観測史上74年ぶりに最高記録を更新するなど、猛暑の夏でしたが、ようやく秋の気配も感じられるようになりました。鈴鹿高専の卒業生の皆様には元気に御活躍のことと思います。私は、19年度入学生と同じ新入りになりますが、学生の成長に負けぬように努めておりますのでよろしくお願い致します。

さて、我が国が高度経済成長の真っ只中にあった時代に、中堅技術者の養成を目的に設置された本校ですが、成熟化、グローバル化、情報化が進む一方、少子高齢化や地球温暖化への対応を迫られるなど、当時予測できなかったような環境を迎えています。卒業生は約6,500人を数えますが、学生や教職員の意識、社会が求める

資質能力の変遷は、誰よりも卒業生の皆様が実社会での経験を通じて肌で感じていることだと思います。

本校ではこうした時代の変化に対応して、学科の改組や専攻科の設置をはじめ、情報化、国際化にも対応した各種取組を進め、平成15年度には日本技術者教育認定機構(JABEE)の技術者教育プログラムの認定を受けました。人材養成の理念としては、「中堅技術者」にとどまらず、「実践力」「人間力」「創造力」を備えた国際社会で活躍するエンジニアを標榜しています。

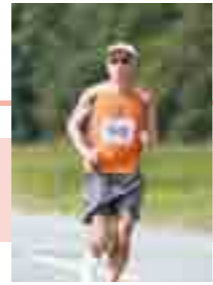
近年の志願率は全国55国立高専中のトップクラスを誇り、希望者を母数とした進学率、就職率は100%に達しています。求人倍率は学科で23倍、専攻科で48倍となっ



# 卒業生便り

## 60歳!これから本番!! 走りの楽しさを追い求めて! 卒サラ1年目は恩師・同僚とマウイマラソンに参加

伊藤(旧姓渡辺)豊嗣(42M卒)



### ■サラリーマン卒業

1期生機械工学科の渡辺というより、陸上部の渡辺と言った方が思い出し易いかもしれません。今は伊藤に姓を変えて名古屋に住んでいます。

さて、1期生のわれわれにとって、昨年は60歳・還暦を迎え、多くの方は定年退職という大きな節目の年でありました。高専生として社会に出るのも初めて、会社社会から卒業(卒サラ)するのも初めてという1期生ならではの経験で、卒サラ後をどのように過ごすかが高専卒のわれわれにとって、今後の大きな課題だと言って過言ではないでしょう。

そこで、昨年4月末定年退職し、約1年が過ぎてしまいましたが、体育会系の私流の生き方を紹介して、これから卒サラする皆さんの参考になればと思ってこの原稿を書いております。

現状では定年延長とか再雇用とかの特典制度も一般化して、必ずしも退職を余儀なくされるわけではありませんが、私はやりたいことがあったので、4月末をもって退職の道を選びました。そのやりたいこととは、「マウイで還暦記念のフルマラソンに出場して、3時間30分以内で走る」ための準備でした。

### ■ランニングとの再会

本校の陸上部ができたのが1963年(以下西暦表示)の2年生のときでした。それ以来卒業するまでの4年間主将を務めさせてもらい、1967年に陸上競技部があった中央発條(株)入社し、10年ほど陸上競技に携わると共に、鈴鹿市内駅伝にもOBとして参加もしておりました。その後は仕事にかまけて運動とは縁が切れ、その上不摂生がたたって50歳を過ぎたあたりでは、自分の体を動かすのも苦しい状況となっていました。ちょうどその頃、工場勤務から技術センター勤務に変わって、仕事に少し余裕ができたのをきっかけに、ジョキングを始めるようにしました。そして、市民ランナーとして目覚め、その魅力に取り付かれて行きました。

2004年には、卒業以来岐阜陸協の審判をする傍ら走っておられた同じクラスの松岡栄一君に加えて、ソニーのリストラでいち早く卒サラをしていた中北勝君を巻き込んで、かつての機械工学科マラソントリオが犬山ハーフマラソンで復活・勢揃いしました。

### ■マウイでの目標は未達成! 中北君はグループ2位!



2位の表彰を受ける中北君(中央)

その大会前日の陸上部OB有志の集まりで、私が「60歳にマウイでフルマラソンを走って、3時間30分をクリアする」と約束をしてしまいました。

そしてそのマウイマラソンと一緒に参加してくれたのが中北勝君夫婦と恩師の勝田先生で、わが家族と合わせて7名、9月14日出発しました。この時期のマウイは大変過ごしやすく、コンドミニアムの自炊生活は、昔の合宿を思い出すような楽しいものでした。

本番のマラソンは17日、朝まだ暗い5時半のスタート。私は30kmまでに10分程度の貯金をしたかったので、前半から積極的に前に出たが、中北君は暑さを考慮して落ち着いたペースで追う形となった。

しかし、私は30kmの手前で突然脚に痙攣が来て、そこからは歩いたり走ったりとなって完全に目標未達。中北君は30km地点で私を抜いて、その後ややペースが落ちたものの、3時間34分54秒で60才~64歳グループで2位の好成績。私は4時間09分18秒で7位と惨敗でした。

### ■年齢相応の楽しみ方を開眼!

勝田恩師からゴール後、「もっと楽しく走れ!」と助言をいただいた。きっとゴールの時には悔しい顔をしていたものと思います。すっこけた私の後ろにも、まだ8割方の人たちが走っていた訳で、「60歳の年齢を考えれば4時間程度でゴールできること自体が素晴らしいことなんだよ!」と慰めていただいた。その時は単に慰めとしか感じなかったが、後から考えるに大変重要なことを教えていただいたのです。そうです、われわれは60歳。勝った・負けたの世界で走っ



「関東地区OB会」  
左より国分、西山、森下、垣本、勝田、天野、神谷、伊藤

ているわけじゃないのです。恩師や家族に迎えられるゴールできることを素直に喜んだり、一緒に旅行できる幸せを感じるような年齢相応の楽しみ方があることに気づきました。

そこで、走りをお笑

に昔の仲間に出会うこともその楽しみの一つとして考え、12月の鈴鹿シティマラソンでは1期生の「還暦を自分たちで祝う会」を開催し、2月には青梅マラソンに出場してその後東京で関東地区OB会(1~7期生)に参加し、1期生の西山茂君とは卒業以来の再会ができました。来春には関西地区のOB会をと考えております。また、今は年賀状だけのやり取りになってしまっている中学時代に転校していった友人、早くして実家に帰った会社の同僚や仕事でお世話になった方々を訪ねる「マラソン旅行」をしようと、いつ・どの大会にするかという思い巡らして楽しんでいるところです。

### ■より楽しく、より長く走る!

マウイの後、11月と3月に、3時間30分の目標に向かってチャレンジしましたが、残念ながら目標を達成することはできませんでした。この一年間大変充実した日々を過ごすことができました。

これからはフルマラソンで記録を狙うことは中北君にお任せすることとし、差し当たりマラニック(30~70km位の距離を、時間をあまり気にせず、道中の景色や名跡などを眺めながら走る競技で、マラソン+ピクニックの造語)で長い距離を走ることに慣れて、その後ウルトラマラソン(50km以上の距離を走るマラソンレース)に挑戦できればと思っています。今年10月の四万十ウルトラマラソン60kmの部に出場したい(抽選)と願っています。そして、65歳までには100kmを是非完走したいと思っています。



「還暦を自分たちで祝う会」  
後列左より松岡、浜口、上野、大形、小島  
前列同祖父江、浜口、勝田、中北、伊藤

また、フルマラソンは離島や遠方の観光地などで行われるものを中心に出場したいと考えていますし、海外の有名な大会(ボストン、ニューヨーク、ベルリンなど)もたくさんあるので、せめて1年に1回ぐらいは家族で参加し、自分だけでなく家族で楽しみたいと思っています。それらをすべて実現するには70歳はもちろん、山田敬蔵さん(1953年ボストンマラソンの優勝者)のように80歳まで走れるように長持ちしなければと心しています。

### ■これからが人生の本番

これまでの会社生活では、高専1期生をはじめとする高専創設期の方たちは精一杯の活躍をし、パイオニアとしてそれなりの地位を築いてきたものと思います。良い人生ではなかったのではないのでしょうか。

しかし退職後20年もの期間が存在します。この期間をどのように過ごすかが本当に楽しい人生であったかどうかを決めるのではないのでしょうか?つまりこれからが人生の本番だと思うのです。

高専卒者としてその未知の世界に入ります。これまでは世のため人のため家族のために働いてきました。私は、これからは自分自身の生きがいのためにこの時間を使ってみようと思って実行しているつもりです。

私や中北君はたまたま趣味の領域でその実現を目指そうとしていますが、「俺は死ぬまで働きたい!」として独立を試みている方や、野菜づくりに腕を磨いている同窓生も知っています。そのほか社会奉仕や違う分野の勉強にチャレンジするなど、しっかり前を向いて生きている友人も見ておりますが、少なくとも、『濡れ落ち葉』とか『粗大ごみ』とか言われぬように、名古屋テレビの『人生の楽園』の番組の如く、人生本番の楽しい計画を作ってみたら如何でしょうか。

\*1 (2006年度フルマラソン1歳刻みランキング:中北君は3時間16分35秒で21位、私は3時間31分22秒70位)

### 【追記】

伊勢市に住む浜口宗幸君(43M)より、「伊勢神宮遷宮行事の一つとして担当地区のお木曳きが5月13日にあるので参加しないか?」との連絡をうけ、勝田恩師、祖父江利夫君(43C)と小島肇君(42M)、桑野克好君と小生の3夫婦計8名が参加させていただき、家族を含めての交流を図ることができました。これからはこんな集まりも企画していきたいと思っています。



(後列左より) 桑野夫婦、伊藤、勝田、祖父江  
(前列左より) 浜口、小島夫婦

## 同窓会のススメ (勧め)

西山 仁 (62M卒)

今年の初め、地元小学校の同級生とともに、毎年恒例の(恒例というのも初めて知りました)「厄年祈願祭」を行いました。とうとう40歳を超える年齢になってきました。生まれてから高専を卒業するのに20年、卒業してから今まで約20年、そう考えるとずいぶん時間がたったものと感じられます。そしてこのまま順当にいけば定年まで約20年ほどでしょうか。(そのころの定年は65歳~70歳?) そう考えてみると20年というのは人生の大きな区切りなのかとしみじみと思ったりします。

そんな歳になると妙に昔の仲間を思い出し、楽しかった(?)寮生活のことを懐かしく思ったりするのは私1人ではないはずでしょう。よし!一度みんなを集めよう! 「これから毎年やるから、どれかには参加するように!」と声をかけ、無理矢理に毎年の恒例行事にしてしまった我が62Mの同窓会も、今年で8年目を迎えています。私自信は学生の頃からみんなで集まってワイワイやるのが好きなほうでしたので、高専祭などのイベントや定期テストのあとは平田駅近辺の焼き肉屋なんかで、盛大に打ち上げをやっていたのかなと記憶しています。(もちろん、みんな成人してからですが...) 卒業してから間もない頃は時折、有志が集まったりしたものでしたが、徐々にみんなも仕事が忙しくなったり家庭を持ったりということで、徐々に集まる機会は少なくなってきました。昨今はずいぶん便利になったものでして、その昔は携帯電話などももちろん無く、やっとポケベルが出回り始めた頃と記憶しています。当時、同窓会をしようものなら連絡手段は、まず案内状を郵送し、そして電話攻勢という手段をとらざるを得ないというよりはそれしかありませんでした。ところが今は1人1台のパソコン時代、そして1人1台の携帯時代ということになりまして、案内の連絡も国内外問わずに瞬時に配信、そして瞬時に返信(仕事中でも?)ということが可能になっています。

ということで、われわれ62Mがここまでたどってきた同窓会の軌跡を、ここでちょっとご紹介させていただきます。

う顔もあれば、卒業して以降初めて見る顔、またははるとアメリカから駆けつけてくれた顔もあり、それはそれは懐かしい話に夜遅くまで花が咲きました。

### ◎平成13年:平田町焼き肉「みさき屋」にて

高専卒業生のみなさんはよくご存じの「みさき屋」です。昨年開催の余韻を引きずって、なつかしの場所での開催となりました。人数は昨年に比べて若干少なめではありましたが、欠席者からは近況報告も届き、昔から変わらない焼き肉の味と、大きく変わってしまった頭髪のボリューム(?)のギャップを感じました。

### ◎平成14年:四日市「亀天」にて

幹事の都合と多忙もあって、この年は近場での開催となりました。来年こそはぜひとも旅行をしよう、と決心しました。

### ◎平成15年:北陸方面への旅行



念願の旅行となりました。といひましてもみなさんお忙しく、参加は8名。自家用車2台で北陸に向けて出発となりました。途中「日本自動車博物館」を見学したり、金沢の市場で高級海鮮丼を食べたりして、さながら「おとなの修学旅行」といった感じでしょうか。帰りには越前カニなどたくさんのお土産を買い込み、帰路へとつきました。

### ◎平成16年:四日市「お半」にて

続けての旅行は幹事としてもちょっとしんどく、今回は居酒屋にてご勘弁いただきました。

### ◎平成17年:湯の山「希望荘」にて

会社の関係で比較的安価に泊まれる施設があるのを思い出し、予約をいれ開催したところ、結構みんなにも評判よく、また、泊まりのほうがゆっくりできるということで、ぜひ翌年も、その次も...と、恒例化していけたらと考えました。

### ◎平成18年:

#### 湯の山「希望荘」にて

今回は、せっかく湯の山に泊まるのだから昼の間に御在所登山をしよう!と声をかけました。昨今の健康ブーム、ウォー



キングブームもあってさぞたくさんの方が参加があるかと思っていたところ5名のみでの参加。それでも中年の老体にむち打って登山を目指しました。下山してから登山無し組と合流し、夜の部へ突入ということになりました。

### ◎平成19年:引き続き、湯の山(の予定...)

今、この報告を書いている段階ではまだ準備していませんが、会報が発行されるころには今年の同窓会も終わっていることと思います。そろそろ本腰をいれてやらねば...

高専の級友というのは、他から見るとちょっと特殊のようで、一つのクラスが5年間同じ顔ぶれで過ごしてきたわけであり(多少の出入りはありましたが...)、その分繋がりも深いものと感じております。また、中学を卒業してからの2年間を全寮制で過ごし、それぞれ「同じ釜の飯を食った仲間」でもあり1年に1回でも顔を合わせると、当時の寮生活や先生の話に花が咲き、ひとときのタイムスリップを感じるものです。

現在、私は石油精製・石油化学コンビナートに関わ

る装置を製造するメーカーに勤務し、10年間の設計課所属を経て今は営業課に所属しております。一品一様の機器を取り扱うということもあって、顧客への訪問面談では技術的な会話も結構多く、学生時代には勉強への情熱が薄かった自分も、さすがにいろいろなことを学ばざるを得ない状況となっています。また、異種業界の雑学なども営業トークの合間に多少は必要であり、その際は旧友からの情報が結構、役に立つこともあるものです。とはいひましても、みんなで集まってワイワイやるときは、仕事のこともなんか忘れて楽しむものです。ストレス解消にはもってこいです。やり始めてからまだ8年ほどですが、この後もできる限り続けていきたいと思っています。また、お世話になった先生を招いたり、他のクラスとの合同開催等いろいろなイベントも考えていきたいと思っています。

最後に、この会報を読んでいる62Mの諸君、同窓会の案内が届きましたら出欠にかかわらず速やかに返信をするように!以上、近況報告でした。

## アメリカに住んでいます

森下 誠 (13E卒)

鈴鹿高専電気工学科を卒業して早6年。アメリカ合衆国オハイオ州に転勤することになった事を卒業研究の担当教官であった北村先生に連絡した事をきっかけに、今回の同窓会報に近況を報告する事になりました。

鈴鹿高専卒業後、電機メーカーに就職し、埼玉県にある工場にて約6年間、生産技術という部署で仕事をしてきました。

業務の内容は、カーオーディオ、カーナビゲーションを生産するための製造工程の設計、生産装置の設計、開発が主なものです。入社当時は日本国内での製造が主流だったものの、近年の製造業の海外へのシフトに伴い、最近2~3年は、中国・タイ・マレーシア・インドネシアと言った東南アジア圏、アメリカ・ブラジルと言った北米、南米への海外出張が増え、気が付けば1年の約半分を海外出張で過ごすといった生活を送っていました。入社当時、海外へ行く事ですら嫌がっていた気持ちも、仕事を通じて海外に行くようになるにつれて、異文化圏での生活の経験、外国人の物の考え方、外国語(英語)の取得をしたい気持ちが強くなり、いつしか海外で働きたいという気持ちに変わり、海外赴任を希望するようになっていました。

そんな矢先、運良く希望が叶い、アメリカ合衆国オハイオ州にあるオフィスへの赴任が決まり、2007年3月より現地で生活を始め、現在に至ります。現在は、語

学(英語)取得のためオハイオ州にある「The Ohio State University」に通い、外国人専用の英語取得プログラムにて英語の勉強をしつつ、2007年9月からのこちらの業務開始に向け、準備を進めています。プログラムには授業以外にもたくさんのアクティビティがあり、アメフトの観戦やラフティングなど充実しています。

人生初の大学生活や、卒業して以来ほとんどやっていなかった勉強や宿題は、社会人として6年間働いてきた体には多少キツイものがありますが、語学取得のためと思い頑張っています。アメリカでの生活は思っていたより楽で日本とは違ってのんびりした感じが、生活するには丁度良いように感じます。

では何かの機会にお会いできる事を期待しています。



### ◎平成12年:鳥羽「ホテル和光」にて

最初の集合、ということで参加者21名と結構集まりました。ちよくちよく会

## 学科近況

### 教養教育学科の近況 出口 芳孝 (48E卒)

表題からいきなりですが、一般科目の名称が変わりました。大学での教養部解体も今は昔となったこの時期に、と思われる向きも多いかと思いますが、実学の塊のような本校においてこそ教養魂を絶やさずいたいという意志やら夢やらの表明だとお考え下さい。

学科主任は今年度学生主事を無事終えられた物理の土田先生、そのあとの新学生主事に国語の西岡先生が入られ、毎朝正門指導の先頭にたってがんばっておられます。

今年は自分が1,2年生の授業を担当していませんので、実感としてはよく分かりませんが、テニス部の部員を見る限りでは、全体的にひ弱になり、今話題のコミュニケーションの能力も落ちてきて、小粒の団子がポツリポツリと孤立している、という感じです。

過去と比較すると悲観的な部分が目立ってしまいますが、周辺の高専、高校と見比べるとなかなか大したもの、いまだに勉強しなければならぬと思っており、試験期間中はかなりしっかり勉強し、課外活動などもこの夏全国大会に進んだクラブの数は過去最高となっています。

学校全体としても、JABEEや外部評価などの形式面の整備が一段落して、いよいよ中味を充実していく段階になっています。英語でも、外国人TAをつけて頂いて、1クラスを4分割した会話の授業が昨年からは始まっています。効果はあがっていますが、TAの個人的な能力に頼るばかりではなく、これから組織として内容を保証していくような取り組みが必要だと思っております。

現在鳥羽商船との合併の話がありますが、全国高専体育大会で、やはり合併の槍玉にあがっている富山商船の先生方と話す機会がありました。目的が経営効率を高めるといふか、要は貧すれば鈍するという窮余の策ですから、想像はしていたものの教育の改善という視点からはかなり厳しい話を多々聞かされました。

社会規範がガラガラ崩れていく音が聞こえているのに、人も金も削られていく現場で、あちらをpushさえこちらを防ぎ身動きもままならぬのは、いずこも同じことなのでしょうが、若い人たちが夢を紡ぐ余地を少しでも稼いでおきたいものです。

先生あるいは学者になりたいそうです。

今回の記事は、半ページという制限があるため、いつもより読みにくくなっておりますが、ご了承ください。機械科のホームページも現在リニューアル中ですので、もうしばらくしてからご覧になれますと、最新の情報が公開されるはずですよ。



### 機械工学科の近況 藤松 孝裕 (62M卒)

機械工学科および本校の卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。さて、本年度も機械工学科の近況を報告せよとのことなので、例年と同じように簡単に紹介させていただきます。この記事も毎年書いていて書くことがなくて、「つまらないことを書くな」というようなお叱りを同級生から受けておりますが、しばらくの間ご容赦ください。

機械工学科の人事では、本校開設以来、初めての女性教員(白木原 香織:材料系の先生ですが、材力として採用されました)が平成19年4月に採用されました。その他9名の教員(打田 元美、埜 克己、佐脇 豊、富岡 巧、末次 正寛、近藤 邦和、民秋 実、藤松 孝裕、白井 達也)、計10名で学生指導に取り組んでおります。

また、5年生の進路ですが、平成19年度は卒業見込み者が38名であり、就職希望者が16名(内定済)というように、就職組が非常に少ない状況であります。今年はこの比率に加えて、編入学でも少々変わっております。それは、機械以外の所属部科(たとえば、数学、物理など)を希望する学生が増加していることです。学生に聞いてみると、

### 電気電子工学科の近況 北村 登 (47E卒)

今年度から全学生が電気電子工学科生となりました。電気工学科としての最後の卒業生となった今年3月の学生の進路は25名が就職、16名が進学でした。就職状況はここ2,3年、学生にとっては非常に恵まれた状況になっています。

近藤 一之先生(52E卒):50代の青春を楽しみつつ、微力ではありますが母校のために役に立つことをと頑張っています。(学科長)

花井 孝明先生:鈴鹿高専に赴任して7年目になりました。現在、専攻科長として、国際的に通用する技術者の育成を目指した専攻科の運営に努めています。

鈴木 昭二先生:停年まであと2年半となりました。残りの時間を悔いのない高専生活にしようと思っています。(5年担任)

伊藤 保之先生:鈴鹿高専に着任して42年が経ちました、後2年半で定年となります。残りの時間を大切にしたいと思っています。(寮務主事補)

中野 荘先生:今年も9月8日にオープンカレッジを実施しました。E科主催の電子工作に多くの市民が参加してくれて大盛況でした。

奥田 一雄先生(52E卒):4年生の担任として元気な学生諸君とともに悪戦苦闘の日々を過ごしています。

川口 雅司先生:専攻科副主任と学生主事補をさせて頂いております。今年の夏は例年より暑く、また9月になってからも残暑が厳しいですが卒業生の皆様も健康に気をつけられ

て頂きたいと思います。

西村 一寛先生:初めての3年担任で毎日苦勞をしていますが、担任の仕事も楽しんでます。

奥野 正明先生:ここ5,6年、我々も学生も一日が22時間ぐらい(もっと?)に感じ、忙しくなったように思われます。卒業生の皆様も体につけ活躍してください。

柴垣 寛治先生:着任から3年が過ぎ、やっと研究設備も整ってきました。高専での活動に是非ご協力いただきたいと思っております。

鈴木 昌一技術職員:近年、ソーラーカープロジェクトの一員として大会まで何かと忙しい日々を送っています。来年は、6位入賞を目標としています。応援よろしくお願いたします。

山田 太技術職員:今年で15年目。年々夏の暑さに弱くなったように感じます。4月から教育研究支援室と新しい組織に配属になり、日々頑張っています。

北村 登(47E卒):教務主事補と情報処理センター長です。情報リテラシーや情報セキュリティに関する内容は日進月歩(では間に合わないですかね)であり、勉強に励んでいます。

### 電子情報工学科の近況 長嶋 孝好 (48E卒)

卒業生の皆さまには、いかがお過ごしでしょうか?さっそくですが、学科の近況をお知らせしたいと思います。

森:4月に鈴鹿高専に赴任しました。1年電子情報工学実験、4・5年情報理論、専攻科1年情報通信工学、デジタル通信システムを担当しています。専門は環境電磁工学で、静電気放電(ESD)に関する研究をしています。今まではどちらかという実験系でしたが、シミュレーションもやり始めたところです。

青山:今年度は助手から助教というようにクラスチェンジのため(待遇は変わらず!)、担当講義が増え、3年の担任を任せられ、と忙しい日々を送っております。研究も共同研究の成果が少しずつ始めているので、今後どのように発展させていくかを考えているところです。

田添:とうとうプロコンで優勝することができました!4年生5名が創造工学で作った『ループ・ゴールドバーグマシン・ビルダー』(仮想空間でのピタゴラス装置)が、自由部門において最優秀賞・文部科学大臣賞をいただきました。新聞・雑誌の取材、BCNのITジュニア賞を受賞、マイクロソフトのイベントに出展など、優勝するといういろいろあるんですね。

伊藤 明:研究室では、MATLABとSIMULINKを使いFPGAへの組み込みプログラム実装を始めました。プライベートでは、中二の息子と一緒にギターを弾くのが最近の楽しみになりました。卒業生の皆様も、忙しい日々の中に楽しみを見つけ、心のバランスを是非お取りください。

渥美:平成17年度以降に電子情報工学科を卒業された皆様には、電気通信の工事担任者試験の一部科目免除が認められます。認められる科目はAIおよびDDの全ての種の「電気通信技術の基礎」になります。今後コンピュータネットワークに掛かる工事に置いても、DD3種以上を持っていることが必須となるそうですので、関連する業界に所属している方は、受験を検討されてみてはいかがでしょうか?

齊藤:電子情報工学科齊藤研究室では「筋肉」と「人間の運動制御系」の研究を始めて10年以上経ちます。多くの卒業生のがんばりのおかげで最近その成果がぞくぞく出てきました。それぞれのモデル化はほぼ終了し、多くの学会や国際会議で、またヨーロッパの学術雑誌に既発表または発表準備中です。どのような内容でまとまったのか、に興味のある旧卒研生は是非連絡をください。

井瀬:今年は夏休みを連続10日取りました。連日35度を超える中、夕方から東京の近郊を歩いてみました。すんでいる近くに名水100選の泉があります。今年のπの日と2πの日のパイを何にしようかと思っているうちに、両日とも過ぎていってしまいました。これぞというパイがあれば教えてください。

## 生物応用化学学科の近況 長原 滋 (52C卒)

卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。3月に松田先生が定年退職されましたが、再雇用教員として引き続き2年間、本校においていただける事になりました。また、4月より2名の女性教員が本学科のスタッフに加わっていただけました。少しずつですが確実に変化して行く本校の様子をこれからもお伝えしてゆきたいと思っております。6名の先生方から近況報告をいただきましたので紹介させていただきます。

**杉山 利章(学科長)**:本年度の就職・進学先を本校C科のホームページに掲載しています。先輩達に負けないように頑張っています。サブプライムとか首相交代とかで社会情勢は混沌としています、それらを乗り越えていく卒業生の皆さんの情熱に期待しています。

**岩田 政司教授(50C卒)**:H19年度の大学評価・学位授与機構「高等専門学校機関別認証評価」専門委員として、いくつかの高専を訪問します。他校の優れた点を鈴鹿高専での教育の参考にしたいと考えています。

**澤田 善秋教授(50C卒)**:赴任後、4年目を迎え学生達と充実した日々を過ごしています。研究はカーボンナノチューブ、蒸留塔、鈴鹿墨に加えてバイオディーゼル燃料と発散気味です。バレー部も我々の学生時代以来33年ぶりにベスト4に出来ました。

**長原 滋准教授(52C卒)**:バドミントン部の顧問として全国高専体育大会の引率で新居浜に行き、昨年度と同様に3位の好成績を収めることができました。校務の一つとして入試広報を担当し、学校説明のために県内外の中

学校を訪問しています。

**中山 浩伸准教授**:2003年4月に外資の製薬会社よりここにおります。分子生物学を基盤に研究を行っています。自分で考え、その場の状況にあった行動を積極的にとれる自律・自立性を持つ人材が育つようがんばっています。

**山本 智代講師**:本年4月に着任しました。専門は機能高分子化学、キラル分析です。昨年度までは大学で研究中心の生活を送っていました。ここでは1~3年生の化学や実験、工業英語を担当し、学生と触れ合う毎日を楽しんでいます。

**淀谷 真也助教**:赴任から4年半が経ちました。現在、卒研究生は学科生三人です。研究面では外部資金を獲得し、ポチポチやれそうな感じです。部活では全国大会出場を果たし、過去最高の全国3位という成績でした。そろそろ、公私共に自分の生き方を固めていかないと考えたりもします。

## 材料工学科の近況 黒田 大介 (h05S卒)

**国枝先生**:本年4月から研究主事を仰せ付かり、安全衛生委員会など全体的なことも行っております。研究は、セラミックスの焼結とか、加熱材昇温材の開発、感染性医療廃棄物の処理などマイクロ波を材料に幅広く適用した研究課題に取り組んでいます。卒業生の諸君のますますの活躍を楽しみにしております。

**井上先生(46H卒)**:学科長2年目として、5年生の進路(進学・就職)がほぼ決定しました。点検評価部会長として来年度のJABEE継続審査に向けて取り組んでいます。従来から取り組んでいる「アルミニウムのリサイクル」に加えて、本年からは新しく「マイクロバブルに関する研究」を始めています。是非、学校に足を運んで近況を知らせてください。

**江崎先生(52H卒)**:専攻科応用物質工学専攻副主任として教務関連の他、研究推進、国際交流、外部評価関連の仕事を担当しています。雑務に追われる日々ですが、高専時代の同級生と夢を語りながら共同の材料開発研究も進めています。また、お立ち寄りください。

**兼松先生**:教務主事補、4年生担任などで忙しい毎日をご過ごしています。環境調和型の表面処理技術や創造性教育について研究を行っています。卒業生の諸君におかれましては、グローバル化の波が押し寄せている産業界にあって、本校で磨きかけた創造性を発揮して、各分野でリーダーとなってなお一層のご活躍をされることを祈念しております。

**宗内先生**:今年4月から材料工学科へ赴任してきました、宗内(そうない)と申します。これまで28年間、企業の研究所((株)東芝およびサムスン横浜研究所)で燃料電池の研究を行ってきました。企業での知識や経験を学生に伝える事ができればと考えています。

**小林先生**:寮務主事補、材料工学科第5学年担任、バスケットボール部顧問などを担当しています。本年度も男女の全国大会出場選手に同行し、新居浜に行ってきました。PVD法による耐食皮膜の製造などを研究しています。年々頭髪が減少していますが、気持ちは若いとき

(?)と変わっていません。近くに来られましたら、遊びに来てください。

**下古谷先生**:材料工学科に赴任して15年が経過しようとしております。19度からは学生主事補として、また交通部会長として学生指導に微力ながら協力する立場となっております。マイクロ波を利用した有機系廃棄物の有効利用に関する研究を行っています。最近の学生は、卒業研究の時間以外はほとんど研究室に顔を出さなくなってきており、昔の学生が一生懸命卒業研究に取り組んでいた姿が懐かしく感じる今日この頃です。

**南部先生(h02H卒)**:情報教育部会委員、剣道部顧問などに所属しています。また、高い水素透過能と耐水素脆性を兼ね備えた水素透過膜合金の設計開発などを研究しています。金属機能材料実験室(3106:旧溶解実験室)を研究室として頂戴し、実験設備を移設しています。学生の居住スペースを確保し、居心地の良い空間創りを行いました。計算機環境や金属-水素系の実験設備も充実していますので、ぜひ一度お立ち寄りください。

**和田先生**:本年度は、物理化学と無機化学の教育に熱意を持って指導しています。研究室では、様々な分光分析技術により、光機能を有するガラスおよびセラミックスの

組成設計に取り組んでいます。

**猿渡技術職員**:早くも11年目になります。現在は主に学生実験と創造工学を担当しております。創造工学では黒田先生とともに何年かぶりでしたら製鉄を復活しましたが、体力の衰えを痛感する今日この頃です。

**宮崎技術職員(h14S卒)**:採用から2年目に突入しました。勉強を教わっていた先生方と一緒に仕事をするという環境は、なかなか刺激的でもしろいです。卒業生の皆様、機会がありましたらぜひお立ち寄りください。

**小倉先生**:平成19年3月末をもってご定年で退職されました。在職中は、種々のタイプの燃料電池およびオゾン発生器の研究開発において素晴らしい成果・実績を残されました。本校では研究主事などの要職を歴任され、電気化学会においても幹事、評議員を務められました。現在も材料工学科特任教授として、教育・研究にご協力頂いています。

**黒田(h05S卒)**:今年で赴任2年目になります。気持ちは卒業時と何も変わっていませんが、疲れがなかなか取れなくなってきました。本校に戻ってきてからh05S卒の同級生から色々連絡を頂戴して、また楽しい日々を送っています。

## 教育研究支援室の紹介 森 邦彦 (58H卒)

平成19年4月1日付の事務部の改組に伴い「事務部教育研究支援室」が発足しました。卒業生の皆様には聞き慣れない名称かもしれませんが、従来、学科事務室、及び実習センタ、情報センタに配属され、実験実習などの技術指導、支援に携わってきた技術職員(旧、技官)が一つになった組織といえ、少し分かって頂けるのではないのでしょうか。

技術の急速な進展に伴い高専の教育研究活動を技術的側面から支えている技術職員の職務は多種多様化・高度化しており、その役割は重要性を増しています。更に、産学官連携や地域連携などによる社会貢献も求められているため、専門分野の異なる技術職員が、お互いの職務を理解・切磋琢磨し合うことにより、本校の教育研究の充実・発展に貢献できる組織を目指しています。平成19年4月1日現在、15名(内、女性2名)によって構成され、本校の卒業生3名が在籍しています。

各種プロジェクト(ロボコン、ソーラーカーなど)、夏季ものづくり体験教室、産学官連携による企業の人材育成事業



夏季ものづくり体験教室「発電機をつくらう」

などにも積極的に参画していますので、卒業生の皆様からのご指導ご鞭撻頂くと共に、学校にお越しの際は、お気軽にお立ち寄りください。

写真は、教育研究支援室が参画した学校行事、地域連携事業の1コマです。



ソーラーカープロジェクト「2007DreamCupソーラーカーレース鈴鹿」



# 退職教職員

お世話になり、  
ありがとうございました。

生物応用化学科  
松田 正徳



### 3.バドミントン部のこと

鈴風第118号P31にバドミントン部5S寺山君が報告しているように、創部以来初の、全国高専体育大会（舞鶴市）で団体戦三位入賞の栄冠を得ました。

E科小林先生を顧問に始動したバドミントン部を縁あって引き継ぎました。当時は、鈴鹿と鳥羽の対抗戦でした。その後、岐阜高専の所先生のご尽力で、岐阜、豊田、沼津にバドミントン部が出来、東海大会の種目に認定されました。さらに、山崎、奥野、長原先生、三重県バドミントン協会の役員大川氏の指導を受け、学生の実力も向上してきました。各年代に、強力な選手が育ちましたが、1D2Sの勝てる選手をそろえることは困難なことでした。学生たちの厳しい練習とクラブの先輩からの激励をいただいたの栄冠でした。定年を前にしての素敵なプレゼントです。現役の学生、クラブの先輩、指導者の各位に感謝しています。後輩の学生には、青春時代、心身の鍛錬に努めてもらいたいと願っています。

（「鈴風」より転載）

### 1. 工場実習（インターンシップ）先訪問のこと

四日市にある有機工業化学関係の企業に、学生が夏期工場実習でお世話になりました。ご挨拶、実習状況、卒業生の様子見にと、訪問させていただきました。その時、卒業生の加藤君と大井君から、脂肪酸モノグリセリドとジグリセリドとの、分子蒸留による分離の説明を受けました。10～50mlの実験室スケールでの分子蒸留は、大学で経験しましたが、一回当たり18L缶スケールの分子蒸留は初めてで、感動しました。分子蒸留前、純度80%程度のモノグリセリドが、純度95%以上に向上し、分子蒸留を実用化したのは日本で初めてだと聞かされました。有名化粧品会社が、是非購入したいと日参したとのことでした。早速、このことを、有機工業化学の授業で披露したら、学生は先輩の活躍ぶりに大きな関心を示しました。「これぞ教育だ。」と、にんまりした次第でした。

### 2. 工業化学科から生物応用化学科へ改組の頃

平成13年4月から、石油化学を中心とした工業化学に生物化学の分野を取り込んだ学科に改組されることになりました。それに伴い、学科の旗を新しく造ることになり、デザインを募集しました。当時、一年生の竹口君の作品が採用されました。双葉は応用化学コースと生物化学コースを象徴し、学生が大きく成長することを祈るものです。また、学科五年間に専攻科二年間加えた学びを、ベンゼン環七個で表し、学問の深遠さと生命の不思議さを水しぶきで表すものです。現在、製薬関係の企業で活躍しています。就職試験の、エピソードがあります。応募に際し、A4一枚に、写真、イラストなどで自己アピールしなさいとの課題がありました。美術部の主将として、水彩画で、爽やかに自己アピールをしました。人事担当者が、「あの爽やかさがポイントでした。」と伝えてくださいました。「全てのことが益となる。」の言葉通りだと思いました。



## 退職にあたって思うこと

材料工学科  
小倉 弘幸



昭和51年4月本校に赴任して以来、31年がアツという間に過ぎ去り定年退職を迎えることになりました。大過なく定年を迎えられたのは皆様のお陰と感謝しております。

赴任時では既に本校を退職された奥井重彦先生、西谷正先生達と同期でした。私は当時32歳、着任1日目、意気揚々と木村和太郎校長にご挨拶、そこで戴いた第一声は「君ね、本校の学生は端正な髪形にするよう指導しているのだよ。君の髪も短かくしてくれ給え。」でした。私は当時の若者がそうであったように長髪にしていたのです。驚くやら恐れ入るやらの初日でした。

本校赴任前は東京芝浦電気（株）（現・東芝）総合研究所におりまして、新型二次電池や燃料電池の研究開発に従事しており、先生になるなどは夢にも思っておりませんでした。しかし縁は異なるものと申しますが、ヒヨクなことから本校との縁が授かりました。

さて、赴任してから、先生とは如何なるものか、どうすれば先生として生業を全うできるかを考えました。そこで思いだしたのが、私がかつて通っていた駿台予備校の名物先生で、鈴木長十といわれる初老の英語の先生でした。実にユニークな授業をされる方で、そのなかでよく覚えておられたことを印象深く覚えております。「先生とは五者でなければならない」です。つまり「五者とは学者、教育者、医者、芸者、役者」である。先生とは基本的には学者であり教育者でなければならないが、それだけでは足りない、加えて授業が分かったかどうか医者の如くに学生の顔色を読み、時には芸者の如く学生の機嫌をとらなければならない、また役者のように演じる必要がある、ということです。私は学生の教育や指導に当たり、この五者を励行したつもりですが、果たしてその成果が得られたかどうかは判然としません。

私が本校におりました約30年間は、大雑把に10年ごとに3つの時代に分けられます。最初の10年は高専に何らの変化が生じなかった時期です。今から言えば実に平穩無事な良い時代でした。つぎの10年は変化の兆しが現れた時期です。現在の共同研究推進センターに属している材料分析室、当時は材料教育研究施設（略称・材研）といいましたが、これの立ち上げがまず最初に起こりました。次いで電子情報工学科や専攻科の設置がなされました。私は当時、材研と専攻科の立ち上げにおもに力を注ぎました。そのうち専攻科は全国で2番目に本校に設置されました。

今、私は教官研究室の雑多な書類等の整理をしていますが、いろいろなものが出てきます。その中にその当時の膨大な資料や書類が出てきます。それらを見るとあの頃はよく頑張ったな、今ならとてもできないな、という思いに駆られます。

そして直近の10年はこれらをベースにした本校の充実期、

成熟期に当たると思います。

これからの10年は、となりますと収縮期に入ると予想されています。しかし縮小の時期こそ好機到来です。教職員の皆様の英知を集結させ、既存の枠を超えた将来展望のある鈴鹿高専を形づくって戴きたいと熱望します。

さて、経る年を思い起こせば、若い頃の私はやけに鼻っ柱が強く、自己独善的で自己顕示欲の強い、人のことが考えられない、要するにいやなヤツだったのです。若い頃はこんなことはあるかもしれませんが、教員はこれであってはいけません。私も最近ではようやく人のことを考えられるようになりましたが、これは教育をしながら逆に、学生達から教えられたことが大であった所以とと思っています。その意味で、一方では学生達は私の師であると思います。黒澤明監督の「七人の侍」で志村喬扮する島田勘兵衛の「人を守ってこそ自分も守れる。己のことばかり考える奴は己をも滅ぼす奴だ。」という台詞がありますが、今更ながらこれを噛み締めております。

組織は所詮、人から成り立ちます。組織の発展をはかるためには教職員の資質向上が要求されます。教員にあっては研究面と併せて、特に人間性の資質向上は是非必要なことです。それを将来の鈴鹿高専発展に寄与させて戴きたいと念じます。

それでは皆様さようなら…とりたいところですが、来年度より本校にて産学官連携担当の特任教授として二度目のお勤めとなりますので、よろしく申し上げます。

（「鈴風」より転載）



## 退職の御挨拶

このたび鈴鹿高専を退職し、4月より東北学院大学工学部の教員に着任いたしました。私は平成元年に大分高専を卒業後、大学に編入して4年間学んだ後、平成5年に鈴鹿高専に赴任して以来14年間お世話になりました。14年間といえば義務教育9年間と高専5年間を合わせた年月になりますので、今春に高専を卒業した学生が小学校に入学して学問を始めた時期に、私も高専で教員としての勉強を始めて、お互いに今春旅立つということも何かの縁ではないかと思っています。振り返ると、私にとって高専という環境は学生として、そして教員として多くのことを学ぶ機会、それを発揮する舞台を提供して頂きました。鈴鹿高専では私が学生を教えたというよりも、むしろ私が学生から学んだことの方が多く、まだ教員としてもこれから修行を積んでいかなければと実感しております。これからも鈴鹿高専の教員であったことに誇りを持ち、鈴鹿高専で学んだことを生かして鋭意努力して参りたいと存じます。私立大学、高専ともに将来安泰の状況ではないことが予想されます。あらゆる面で私を育てて下さいました高専の教職員、および卒業生の方々とは、今後ともさまざまな交流を持ち続けたいと思いますので、変わらぬ御指導御鞭撻のほど宜しくお願いいたします。

さて、現所属の東北学院大学は東北地方以外ではあまり知名度がないと思いますので、この場をお借りして少し紹介させていただきます。東北学院大学は学生数一万二千余名で、土樋キャンパス（仙台市青葉区）、泉キャンパス（仙台市泉区）、そして工学部がある多賀城キャンパス（多賀城市）の3つのキャンパスを有しています。

東北学院の創立は、私塾「仙台神学校」が開設された1886年ですので、起源としては東北大学よりも古い歴史があり、文豪島崎藤村が作文教師として着任したことで知られています。本学院はキリスト教教育を建学の精神としており、キリスト教は必修、各キャンパスの礼拝堂では授業期間は毎日礼拝が行われています。また、各種会議や学校行事等の際には黙祷で始まり、休業期間には修養会が行われており多くの教職員が参加しています。学部設置は1962年（昭和37年）ですので鈴鹿高専と同じ年です。多賀城キャンパスはJR仙石線多賀城駅から徒歩数分とアクセスの良い場所にあり、仙台からも30分程度ですので東北方面にお越しの際には是非とも立ち寄り下さいますよう、お待ちしております。

最後に、私は新任教員ということで、この夏季休業中には本学の修養会、およびキリスト教学校同盟研究会などに参加して、キリスト教についての知識を学ぶ機会を頂きました。この機会に学んだ聖書の言葉や講師の方のお話の中で、今の私に非常に印象に残る話を紹介させて頂きたいと思います。

東北学院大学工学部  
電気情報工学科  
吉川 英機



・聖学院大学学長 阿久戸光晴氏 第77回キリスト教学校同盟夏季研究集会講演より

見えるものは目に見えるものからできたのではない。幻がなければ民は墮落する。

virtual realityというIT言語があり、日本では「仮想現実」と訳される。しかし、virtualの語源は「美德」を意味するvirtueであり、「実質的には存在するもの」が本来の意味である。invisibleではあるが、fictionalではなく、virtualに存在するrealityが物事の奥底に潜んでいる。良いvirtual reality'があつてこそ真の'reality'が現れてくる。これを教育に当てはめれば、良き教育ヴィジョンがあつてこそ、青少年の「人格の完成」への道が開かれる。

・新約聖書 コリントの使徒への手紙Ⅱ第4章 18節より

「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」

鈴鹿高専は「知・徳・体」を教育理念の礎としてこれまで多くの優秀な卒業生を輩出してきました。今後とも良き教育理念の下に鈴鹿高専の益々の発展と教職員および卒業生の方々のご活躍を祈念しつつ、筆を置きたいと思います。



## 平成18年度 青峰同窓会 会計報告

### 収入の部

摘要	金額(円)
平成17年度からの繰越金	42,117,894
平成17年度卒業生等より入会金・終身会費	2,387,000
預金利息	13,405
合計	44,518,299

### 支出の部

摘要	金額(円)
会報発行経費	739,976
事務費	963,072
次年度へ繰越金	42,815,251
合計	44,518,299

## 平成19年度 青峰同窓会 会計予算(案)

### 収入の部

摘要	金額(円)
平成18年度からの繰越金	42,815,251
平成18年度卒業生入会金・終身会費(219名)	2,409,000
合計	45,224,251

### 支出の部

摘要	金額(円)
総会、理事会等の会議費	50,000
会報発行経費	1,000,000
事務費	50,000
次年度へ繰越金	44,124,251
合計	45,224,251

## 編集後記

これを読んでいただいている頃には、一年で一番過ごしやすい時期になっていると思います。今年の夏は日本中本当に暑い日が続きましたが、皆さんはどのような夏を過ごされましたでしょうか。

さて会長挨拶にもありますように、今回の会報は住所確認の目的もかねて全卒業生に発送しました。昨年の会報が届いていない方は、まだ会員になっていただけておりませんので、この機会に是非入会していただければと思っております。

また、現在約1500名の方が住所不明となっており、会報などの発送ができなくなっております。お近くで

今回の会報が届いていない方が見えましたら、同窓会宛に連絡先などを知らせていただけますよう、お伝えいただければ幸いです。所属先が古いデータのままでの方も多く見えるかと思いますが、同窓会までご連絡いただけますようお願い申し上げます。

北村(47E卒)





# 鈴鹿高専ヒューマン&テクノロジー ネットワーク(SHTN)

## 第8回総会・第15回技術交流会 開催のお知らせ

平成19年11月3日(土)に定例の総会と技術交流会を開催いたします。

今回は、本校副校長の齋藤正美氏(42M)による「ようこそ先輩!ものづくり技術者育成授業を開きます」と題した講演を行います。また、若手で第一線において活躍されている方々3名にも講演いただきます。

懐かしい卒業生、教員と再会できるプチ同窓会も兼ねて参加いただければと思います。

**日時:平成19年11月3日(土)13:30~19:00**

**場所:鈴鹿高専 マルチメディア棟 視聴覚室**

**13:30~ 総会**

**14:30~16:00 技術交流会**

14:30 - 14:50

(1)「万古焼の現状と高付加価値化」

竹内 理さん (H05S 竹泉窯 竹政製陶有限公司 専務)

14:50 - 15:10

(2)「高専から学位取得までの道」

西川幸成さん (H14Dヤマハ株式会社)

15:10 - 15:30

(3)「中国における高度成長の裏側 ~現状と問題点~」

濃野将典さん (H10C 三菱化学株式会社)

15:30 - 16:00

(4)「ようこそ先輩!ものづくり技術者育成授業を開きます」

齋藤正美副校長 (42M 鈴鹿高専)

**17:00~19:00 懇親会(第1会議室)**

誌名 青峰同窓会会報

発行日 2007年10月 発行

国立鈴鹿工業高等専門学校 青峰同窓会 広報委員会

〒510-0294 鈴鹿市白子町 ☎059-386-1031

E-mail/almn@suzuka-ct.ac.jp

ホームページアドレス <http://www.suzuka-ct.ac.jp/~almn/>